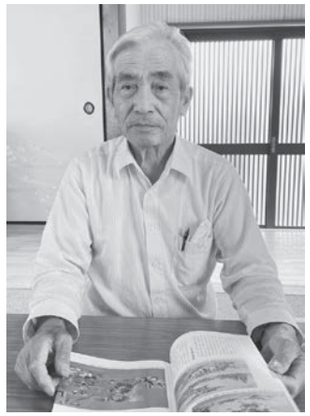
びわ湖漁業の今昔

昭和40年頃のびわ湖漁の一年

漁師歴58年
松沢松治さん（中主漁協）に聞く

今回お話を伺ったのは野洲市・中主漁業協同組合の松沢松治さん。環境問題や地域の活性化などにも積極的に関わってこられた漁師さんで、実は個人的にも随分お世話になってきた方でもある。中主漁協の事務所でお話を伺った。

▲竹棹を使った魞（写真提供／滋賀県水産試験場）


▲中主漁協の松沢松治さん

松沢さんは昭和21年生まれ。漁師になったのは58年前、昭和39年のことである。

びわ湖の漁業は当時とは全く変わってしまったと松沢さんは言う。

「まず漁具が違う。網も絹糸やったし。魞（えり）も竹製やったから浅いところにしか設置できんかった」。

しかし、何より変わったのはびわ湖の周辺の環境であり、捕れる魚だ、とおっしゃる。

びわ湖漁業の現在については他の方に任せることにして、ここでは松沢さんに伺った昭和40年代前半の中主町における漁師の一年をご紹介する。

当時の4月からの漁のカレンダーはざっと次のとおりである。

4月　ホンモロコ（春モロコ）
　　ニゴロブナ（6月頃まで）
6月　スジエビ
7月　ウロリ（ビワヨシノボリの稚魚）
　　ホンモロコ（夏モロコ）
9月　イケチョウガイ（真珠養殖用）
12月　ウグイ　フナ（寒ブナ）　イサザ

この中から、松沢さんの印象が強いと言われたものを中心にご紹介する。

イケチョウガイ

松沢さんが漁師を始めた頃、花形だったのは真珠。つまりイケチョウガイ漁と真珠の養殖である。

▲びわ湖真珠の核入れ作業をおこなう女性たち。1968年（写真提供／琵琶湖博物館）

▲イケチョウガイから真珠を取り出す（写真提供／滋賀県水産試験場）

イケチョウガイはシジミよりずっと大きい二枚貝だが、身が硬くて食用には向かず、昭和30年代以前に市場価値は無かった。そればかりか、シジミを捕るために湖底を曳く漁具（マンガンという）の下に挟まると漁具が浮き、せっかく捕れたシジミが抜けていってしまうため、漁師の間では「厄介もの」だったのだ。

それが、真珠母貝として一躍脚光を浴びるようになると、最初は貝を捕って養殖業者に売るだけだった松沢さんたちも、自分らも養殖して真珠を作って売ろう、ということになった。

イケチョウガイ漁は9月1日に解禁される。イケチョウガイはシジミのように砂地だけでなく泥地にもたくさん生息しており、大卒初任給が2万円だった時代に指先ほどの稚貝が当時の値段で1個千円で売れたというから驚きだ（※これが一日に何個捕れたかはご想像にお任せする）。

しかし、昭和45年ころから、おそらく水質の悪化でイケチョウガイは徐々に捕れなくなり、その後も母貝の成長不良、中国産真珠の市場参入などもあって、急激に衰退していくことになる。なお、近年淡水真珠は再び脚光を浴びるようになった。

ホンモロコ、フナ、ウグイ

いきなり貝の話からスタートしてしまったが、漁と言えばイメージするのはやはり魚だろう。そしてびわ湖を代表する魚と言えばアユ！　と行きたいところだが、松沢さんに伺うと当時はちょっと違っていたらしい。

「もともとアユはびわ湖で捕る魚やなかった。川に設置した簗（やな）（25ページ参照）で捕る魚で、まぁ、追いさで漁とかあるにはあったが、わしらびわ湖漁師からしてみるとアユは『川魚』という感じやったな」。

魞でアユを捕るようになったのは、ある漁師さんがそれまでコイやフナなどのサイズに合わせていた網の目合いを、アユ用に細かくしてみたのが始まりだそうだ。

松沢さんも初めは「そんなんでアユが捕れるんかいな?」と思っていたそうだが、その後、支柱が竹製からグラスファイバー製になり、魞を沖の方まで伸ばせるようになると、びわ湖の魞によるアユ漁はどんどん広まっていった。

さて、昭和40年当時のびわ湖漁業の中心はニゴロブナやウグイ、そしてホンモロコなどだったという。松沢さんが捕った魚のほとんどは京都に卸していたそうだ。以前、錦市場界隈をブラブラした時、びわ湖の魚がたくさん並んでいるのに驚いたことを思い出した。

さて、ホンモロコ漁のシーズンは4月の春モロコと7月頃の夏モロコの二度あったそうだ。

また、鮒ずし用のニゴロブナは4月下旬から6月頃までが漁期である。当時は今より湖岸に寄って来る時期がずっと遅かったと松沢さんは言う。

「あいつらは濁り水を合図に遡上すると言われているな。昔は田植えの時期も今より遅かったわ。関係しているかどうかは知らんけど」。

12月に捕れるフナは寒ブナと呼ばれる。とりわけフナのジョキ（三枚におろし、皮は引かずに小骨ごと細く刻んだ刺身）は筆者も大好きなびわ湖の冬の味覚である。